日本経済史事始め

寺西　重郎
一橋大学名誉教授

私の経済史研究の初期の時期についてエピソードを交えつつ書いてほしいと言うことが編集部の要請である。問題を絞って、もともと理論経済学志向であった私がなぜ日本経済史の道に進んだかということの経緯を中心に取りまとめてみよう。

１９６３年春、一橋大学の経済学部後期課程に進んだ私が選んだゼミは中山伊知郎先生のお弟子の坂本二郎先生のゼミであった。坂本先生はシュンペーターの研究で有名であったことが選んだ理由であったが、当時の先生は未来学者として現代経済社会論の論客として活躍中で、基礎が十分にできていない自分は本格的に思想や理論の基礎を学ばなければならないと思っていた私の思いには必ずしもぴったり来るものではなかった。大学院の入試に合格して何人かの人に相談した結果、研究所の篠原美代平教授が日本経済論の花形であり、一橋の経済学のリーダーであると言う話を耳にした。ある日篠原研究室を訪ねたことから私の経済研究所との関わりと経済学研究が始まった。確かその時はまだ今の経済研究所の建物は出来てなくて、東校舎の一角に研究所が仮住まいをしており、篠原先生の研究室もそこにあったと思う。

話は少しさかのぼるが、私は大学時代サッカー部に所属しており、あまり体力もないくせに、１年３６５日がサッカー漬けの日々でまともに授業にでることもなかった。大学時代の成果と言えば運動で少しは体が強くなったことぐらいであった。殆ど何も考えることもなく、と言うよりは瀬戸内海の島（広島県尾道市）から出てきて、都会の大学生活になじむのが精いっぱいと言う４年間であった。本もあれこれ読んではみたがどれもピンと来るものがなく、ただボーッとしているだけの何も考えることもない、言わば大学生としては間違いなく落ちこぼれであった。４年生に成って友人が就職活動を始めたのを見て私をあわてていくつかの会社を受けてみたが、ことごとく失敗し、仕方なく大学院に進んだという状況であった。そうしたわけで、大学院でも修士２年が済めばどこかに就職してもよいとか考えていたと思う。私をゼミ生として引き受けてくださった篠原先生も「新聞社ぐらいならいつでも就職を紹介出来るから」ということで引き受けていただいたと言う次第であった。先生は、このぼんやりした学生を就職させるためには、とにかく２年間で修士論文を書かせなければならないとお考えになったのであろう、最初から徹底的に実戦的な教育を受けることになった。化学会社数社の財務と生産のデータを与えられて、これらのデータから何かファク

ト・ファインディングせよ、と言うのが最初の先生の下さった課題であった。今から考えると、先生は「篠原経済学」の実証分析の真髄を叩き込もうと意図されたのであろう。しかし私の方は、なんとか何枚かのグラフを書いて見たが、何のためにそんなことをやるのかさっぱり分からず、途方に暮れたのを覚えている。そうこうして１年ほど経った時、篠原先生はハワイ大学の東西センターに１年間行かれることになり、私は『日本の景気循環』（勁草書房、１９６５年）で当時勇名をはせておられた藤野正三郎先生に預けられ、その後篠原先生の帰国後も両先生の話し合いで私は藤野ゼミに移ることとなった。

このころの終生忘れられない思い出にインドネシアの調査旅行がある。太平洋クラブに所属していた私の友人がインドネシアへの調査旅行を計画していて、私を誘ってくれたことによる。大学院の一年の夏に約１か月半ジャワ島を中心に「社会経済状況の調査」を行ったのである。当時はまだ学生が海外に行くなどということは珍しく、費用的にも大変であった。そのため太平洋クラブという課外活動のクラブを作って、企業からの寄付をもらうという方法がとられたのである。ただ、企業回りをして寄付をもらうには学生部長（当時は石田忠社会学部教授）の認可というお墨付きが必要であり、そのためには大学院の学生が参加していることが好都合であったから私が誘われたのであった。面接審査を経てもらったお墨付きの効果は抜群であり、何社かの大企業から予想以上の額の寄付をいただいた。加えてオンワード樫山からはみんなの制服、中外製薬からは薬一式といった寄付もあった。初めて飛行機に乗り、初めて訪れた海外の世界はまさに夢のごとくであった。隊長として一行を率いてくださった板垣與一教授（経済政策論）がスカルノ大統領と懇意であったことなどから、ムルデカ宮殿での独立記念式典に出席したり、日本大使館で夕食の招待を受けたりの日々であった。肝心の「調査」では、結局ジャワを一周し、村々では村長の家に泊めてもらった。プランバナンという遺跡のある町では月夜の明かりの下で遺跡を舞台に繰り広げられるラーマヤナの劇を見たり、まだ修復されていないボロブドゥールの遺跡を観光したりもした。

この旅行の結果、私は板垣先生と親しく接することになり、その後もしばしばお話を聞く機会があった。先生はいつも葉書で銀杏書房に本を注文され、それを月に何度か引き取りに銀杏書房に来られるということをなさっていた。何冊もの本を風呂敷包にして抱えて自宅まで持ち帰られるのである。私は当時毎日のように銀杏書房に行っていたから、しばしば先生にお会いした。そうすると風呂敷包み運搬のお役を仰せつかるということになるわけである。ただ運搬するのではなく、ロージナの隣にあった邪宗門という先生お気に入りの喫茶店に立ちより、コーヒーをごちそうになりながら、先生の政治経済学のお話を伺うというのが常であった。少なくとも１時間、長いときは２、３時間以上も拝聴するというのがいつもの段取りであった。グスタフ・シュモラー、カール・メンガー、ポール・バラン、ポール・スィージー・・・。お話は縦横無尽に多岐にわたり、尽きることはなかった。先生の経済政

策概論の講義でも何冊もの本を持ってこられて、その説明をなさるのが常であった。ラテン語・オランダ語を含む数か国語に堪能な先生の学識のあふれるお話は、当時、数学にはまっていた私には新鮮そのものであったが、どのくらい理解できていたかは定かでない。とにかく、とてつもなく広い知識の海に自分は漕ぎ出しているのだ、という自覚をこの時持ったことは確かである。

博士課程に入って私の師となられた藤野先生は日本の景気循環分析で当時大変著名であったが、「経済学のミニマム・エッセンシャルズ」と言う論文を『思想』に書かれたぐらい、徹底した基礎理論重視の先生であり、私にはこれが幸いしたように思われる。まずミクロとマクロの基礎を徹底してやれと言われて、J.R.ヒックスの「価値と資本」（岩波現代叢書）などを手始めに、博士課程に行ってからは P.サミュエルソンの *Foundation of Economic Analysis*（Harvard Economic Studies）などを徹底して読んだ記憶がある。当時２学年下には統計学の磯野ゼミの（のちに同僚となる）刈屋武昭がいたが、彼と一緒に、と言うより、彼の指導のもとで数学もずいぶんやった。１９６７年から６９年ごろにかけて、コルモゴロフ・フォーミンの『関数解析の基礎』（岩波書店、１９６２年）やポントリヤーギンの『常微分方程式』（共立出版、１９６７年）、皆川多喜蔵の『射影幾何』（至文社、１９６６年）など数冊の数学書を、朝から晩まで二人で議論しながら読み続けたことは忘れがたい思い出である。博士課程３年のころには阪大から二階堂副包先生が来られたので一般均衡論がはやり、先生の『現代経済学の数学的方法』（岩波書店、１９６０年）や G.ドブルーの *Theory of Value*（Cowles Foundation　Monograph Series）の一般均衡解の存在証明に魅了されたのもこのころのことであった。と言うわけで、博士課程に進学しての私は、水を得た魚と言うか、経済理論に魅せられ、今から考えても夢のような３年間を過ごした。「参入価格と意図された過剰能力」、”Money in Portfolio Analysis”、「失業・人手不足と貨幣的成長」と言う３本の理論に関する論文が、３年足らずのうちに立て続けに雑誌『季刊理論経済学』（現在の *Japanese Economic Review*）に掲載されたのも、このころであった。

さて、そんな「理論経済学っ子」であった私が現在のような経済史の研究者になったのには、経済研究所に就職したことがきっかけであった。私は博士課程３年の時に、今度は大学への就職と言う苦手な就活問題に再び直面することとなった。その頃阪大から専任講師として雇ってもよいと言う話が藤野先生のところに来ていたようであった。しかし私は、また慣れない地であれこれ調整に時間を取られるのはかなわないと思い、助手でも何でもよいから一橋に居ることはできませんか、と藤野先生にお聞きした。先生は苦笑されて「しょうがない奴だ」と言うことで一橋の研究所に専任講師として雇っていただくこととなった。１９７０年の春のことであり大学紛争が一橋でも吹き荒れていた時期であった。本館も過激派に封鎖されていたはずである。教授会は連日深夜まで開かれており、私の人事など扱え

る状況ではなかった。結局私が就職できたのは普通の２カ月遅れの５月１日付であった。当時の研究所は分析手法を行とし、地域分野を列にする行列型の研究組織を取っていたが、私は藤野先生の所属する日本経済第二部門の貨幣的分析担当に入ることとなった。第一部門には大川一司先生や南亮進助教授などがおられた。

当時の経済研究所は、何やら活気にあふれていたように思われる。スター的な有名教授、都留重人、大川一司、篠原美代平それに新進の藤野正三郎教授などがいたことに加えて、のちに研究所の名声を内外に高めた日本経済の長期経済統計の推計がその佳境に入っていたことによるのであろう。多数の内外の研究者が来訪し、各研究室では何人もの計算補助の女性アルバイターがいた。まだシャープの計算機が出たばかりのころであり、大部分はそろばんによる人海戦術による作業であった。このプロジェクトは当時、所内ではロック・プロジェクトと呼ばれていたが、文字通りアメリカのロックフェラー財団の援助で始まった研究であった。のちに資金源は科研費に切り替わるのであるが、このことの意味は現在の視点からはかなり重要であると思われる。ロックフェラーはアメリカの中では比較的に中立的な財団であったが、当時の東西冷戦の激化と第二次大戦後の第三世界の誕生と言う世界情勢の下で、アメリカの世界戦略の一環としてこのプロジェクトが始まったのである。新興の途上国は独立後の発展戦略を模索しており、アメリカとソ連は朝鮮戦争からベトナム戦争までの軍事衝突を含む熾烈な冷戦下にあった。その中で米ソが世界の経済システムの在り方をめぐって経済成長力競争にしのぎを削っていただけでなく、経済学もその中に組み込まれていたのである。当時の日本の大学の経済学の大部分は、マル経すなわちマルクス経済学と近経すなわち非マルクス経済学の専攻が教授のポストや講義の内容において拮抗しており、日本でも社会主義革命の可能性が現実性をもって語られていたような時代であった。こうした中で、日本は資本主義陣営の極東における最前線であった。アメリカにとって日本経済の明治以来の経済成長は、資本主義経済成長モデルの優秀さを示すための格好の題材であったのであり、その研究を支援することはアメリカの世界戦略の一環としての重要な意味を持っていたのであった。経済理論面では計量経済学やゲーム理論はまだ揺籃期にあり、ケインズ経済学の興隆の影響下で、マクロの経済成長理論と一般均衡論が花形の分野であった。いわば、アメリカの文化的覇権主義の下で、日本経済のマクロ的成長分析は世界の最先端分野であった。そうした状況下で一橋の長期経済統計分析は進行したという側面があるのである。

さて、私の研究であるが、１９７０年５月の辞令を受け取った日かその数日後であったが、藤野先生の研究室に呼ばれて、一冊の古色蒼然たる統計書を手渡された。大蔵省の昭和戦前期の『預金部報告書』であった。先生曰く、現在、戦前期日本の資金循環勘定の推計を始めている。それをお前に引き継ぐから、まず大蔵省の預金部の貸借対照表の推計から取り掛か

ってほしい、と言うことであった。全くの「理論っ子」で、もちろん預金部などの存在すらも知らない私にとっては、晴天の霹靂であったが、それが現在まで続いている日本金融史とのかかわりの始まりであった。その頃統計部門の溝口敏行助教授が「寺西さん、こういう仕事は、いつの間にか、気づいたら出来上がっていた」と言うタイプの仕事だから、絶対に焦ってはだめだよ、と教えてくださったことが強く記憶に残っている。資金循環表の推計にはその後３０年近くかかり、２０００年の藤野・寺西『日本金融の数量分析』（東洋経済新報社）の刊行で一応の完成を見た。こうした大きな仕事を構想し完成させると言う研究姿勢の面では藤野先生は卓越しており、マクロ経済分析での業績は言うまでもないが、在庫の歴史データ構築や長期の景気指数の作成など日本のマクロ的歴史研究の基礎データの構築においてもたぐいまれな貢献をされたと言えよう。基礎データの構築にもとづく歴史分析と言う先生の姿勢から多くのものを学んだ。私は個別の銀行・会社や商家のデータを発掘して分析する能力は全くないが、マクロ的データを用いることで一応金融史の仲間に入れてもらえるようになったのはひとえに藤野教授から教わった研究方法による。

私が経済史研究に踏み込むことになったのはこのように日本経済の実証研究をいわば研究所員の「業務」として行うことになったからであるが、単なる理論から離れて歴史研究を志すきっかけとなったことには、一つには東大の宇沢弘文教授の影響がある。宇沢教授はシカゴ大学でミルトン・フリードマンの新自由主義的な思想とベトナム戦争などに関する態度の点で強く対立し、１９７０年前後には日本に帰ることを考えておられた。その際一橋も小島清（国際経済学）、二階堂副包、藤野正三郎などの方が強い歓迎の姿勢を示し、確か３度くらいの連続公演をお願いしたと言う経緯があった。結果的には宇沢さんは東大に帰られたのであるが、そのころから私は宇沢さんの友人の藤野先生の弟子であるということで様々なことでお会いする機会を持つこととなった。宇沢さんは自分のお弟子である海外の経済学者を呼んで、たびたび国際コンファランスを開催されていた。１９７１年ごろであったと思うが、国際計量経済学会のファー・イースタン・ミーティングが東京で開かれたが、その時報告した私の論文のコメンターは宇沢さんのお弟子のスティグリッツ（後にノーベル賞受賞、現コロンビア大教授）であった。その後も箱根、宝塚、六甲、逗子などで何度もコンファランスが開かれたが、私は殆どすべての会合に呼ばれて、宇沢さんのお酒のお伴をし、また宇沢さんの東大ラグビー部時代の先輩であり同じ数学科出身であった稲田献一阪大教授にマージャンのお伴をさせられることになった。その後も宇沢教授とのおつきあいはあれこれ続き、最後は、２００５年に日大の経済学部に設立された中国アジア研究センターの顧問を私と宇沢さんで引き受け、講演会のある度にお酒を飲み、語り合うと言うお付き合いを数年間させていただいた。

私が経済史研究に進むことに理論経済学者の宇沢さんの影響があったと言うと不思議か

もしれない。しかし私の３０代のもっとも多感な時期に宇沢さんから教わったことは、新古典派の世界の機械性・非人間性・非社会性などという問題点だった。新古典派の成長モデルは当時の最先端の研究テーマであったが、その一つ一つの方程式や関数を取り上げて、それがいかに現実の企業や人間の行動の過度の抽象化に陥っているかを諄々と説かれる様子は今でもありありと思い出される。宇沢さん自身はこうした判断を基にヴェブレンやケインズの研究に進まれたわけだが、私に対しては経済史をやるに際しても常に人間を見ること、社会の在り方を考えることを指導してくれたと思う。加えて理論構築の厳密性と言う点では、私は全くかなわない雲の上の人であったが、隙のない理論展開が必要であることは身に沁み込むまで教わったと思う。あるとき、箱根の開銀の寮で開かれたコンファランスでは、スティグリッツが朝１０時からから夜の７時まで一人でブっとおしで資本コストの論文を報告したこともあった。私には英語の問題もあり、よくついていけないところもあったが、普通なら、他の論文でも一般的に用いられているとして、簡単に片づけられるあらゆる関数、仮定の意味を徹底して議論して詰めるという姿勢は実に感動的でさえあった。私は現在、哲学史・宗教史の視点を加味した経済史、言い換えると文化史と経済史の接合部面での研究に向かっているのだが、この研究を進めるにあたってこうしたトレーニングが、若いころの数学のトレーニングと並んで、役立っていることを実感している。

また最近になって思うのだが、宇沢さんはやはり本質的な問題に肉薄していたと思う。宇沢さんの有名な二部門成長のモデルは消費財と投資財の二部門もモデルであり、当時一橋で中心的な話題であった農業と工業の二部門モデルではないことが私にとって不満であった。しかし現在の時点で考えると、そうした伝統的な先進・後進と言う経済発展論ではなく消費財の生産と言う本質的な変数で成長を論じると言うことは、人間と消費の関係と言うもっと普遍的な経済発展の問題にかかわっていると言う意味を持っている。またその後に宇沢さんが提唱された社会的間接資本の問題も地球資源の有限性と人間活動の在り方と言う意味で普遍的本質的である。今後の日本経済史の研究もこうした視点から取り組む必要があるのではないかといまさらながら思うわけである。

最後になるが、私に経済史研究の「面白さ」を教えてくれて、私がそこから抜け出せなくなるきっかけを与えてくださった方として中村隆英東大教授がある。中村さんとの最初の出会いは『経済研究』に「日本経済論の展望：戦前の部その１」（１９７２年）のシリーズのサーベイ論文を書いていた頃だった。確か如水会館で行われた何かの会議に中村さんも出席しておられて、寺西論文は日本資本主義論争を踏まえていない、と言うきついご批判をいただいたのが最初の出会いであった。黒縁の眼鏡をかけて働き盛りの先生のご様子はちょっと怖かったことを覚えている。このサーベイ論文は、理論ばっかりやっていて何も実証研究をしたことのない私に勉強させるために藤野先生が勧めてくださったテーマであった

が、「その３」まで書いたところで、塩野谷祐一教授（後、学長）からの「サーベイばっかりやっていないで、自分の仕事をやらなければだめだ」と言うもっともな批判の一撃もあって、それきりで終わりとなった。

中村さんとはその後も何度かさまざまなコンファランスでお会いしたと思うが、親しくなったのは、１９８１年ごろから始まった松方デフレに関するアジア経済研究所の研究会に参加させていただいてからであった。この研究会で私は政治経済史学と言うものの面白さを初めて教わり、その結果日本経済史研究に「はまってしまった」。特に中村さんの人柄に触れるとともに、日本政治史の坂野潤治東大教授と出会ったことが私にとって大きな収穫であった。会議の後で中村さん、坂野さん、それに阪大（後、国際日本文化研究センター）の猪木武徳さんなどといっしょに中村さんのお宅の近くの五反田の居酒屋や坂野さん行きつけの銀座のバーなどで酒を飲んだことの経験は貴重であった。私は相変わらず理論屋で歴史の知識が不足しており、中村さんと坂野さんの政治史論議特にさまざまな人物論議にはついていけないことも多かったが、とにかく勉強になった。中村さんが毎晩寝る前に『原敬日記』を数頁読むのが習慣だと言われるのを聞いて、あわてて全何巻かの日記を手に入れたが、当然ながら私には、とても寝る前の楽しみに読めるという代物ではなかった。中村さんの業積は在来産業論などが有名であるが、その学問の真骨頂は歴史上の人物論ではないかと思う。伊藤博文にせよ西郷隆盛にせよ井上馨にせよ、中村さんの研究の基底には歴史上の人物の人生と思想、行動に対する理解を基礎に政治経済史を組み立てるという姿勢が貫かれていると思う。その真骨頂が３年ほど前に発売された『明治大正史』（東洋経済新報社）であろう。これについては日本経済新聞（２０１５年１１月２２日）に書評を書いたので参照してほしい。

私は現在、日本金融史と日本経済史の研究の到達点として、鎌倉新仏教を中心とする宗教日本の経済文化の研究にとりかかっている。この研究テーマは人間の在り方から発想するという諸先生方の教えの延長上にあるのではないかと言う思いを、いまさらながら、強くして居る。この点についてはまた講を改めて取りまとめたいと思う。